

駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 9 号

平成 2 年 3 月 25 日 発行

明治鍼灸大学図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181(代)

読みすて時代に

図書館長 中 村 清

ある古書籍商のエッセイに、古本をまとめて引き取るときに、時として書店が付けてくれたカバーのまま書架にたくさん並んでいることがあり、それを外しながらエッセイ集など現れてくる本の種類を見て売り手つまりその本の山の読者の興味、人物などの品定めをする話があった。

カバーの一つの目的は本の本体の保護であるが、今感覚は本という物を消費物化する方向を強めているようである。勿論本はこれからも知識の宝庫であり知的財産であり続けるだろうが、むしろ最新の情報を伝達する手段としての機能の方がより一層活用されている現状である。カラフルな装丁で人々の目を引き、ファッションの感覚で購買欲をそそって売り込みを図る商品として店頭に並んでいるという感じがする。そしてそれは雑高書低である。住宅やアルバイトなどといった新種の実用目的に至るまで、新しい耳よりの情報をまず提供しようとする雑誌や雑誌的な出版物が目覚ましく伸びて売り場を拡大させ、それもイラストや写真で最大限に視覚に訴えるインスタントなメディアが若い人たちを集めている。単行本も、文庫本や新書版という廉価で手軽な種類がめっきり増えた。

激しく流動する現代の社会情勢の中で、出版

界もまたかなり様変わりして、本や雑誌は流通する新鮮な消費物つまり「読みすて」のものが大きな割合を占めるようになってきている。それでも有用な情報源として永続的価値のあるものは書籍として残される必要があり、豊かで高度の内容の蔵書は図書館の誇りであり続けるであろうが、その一方そのためには必ずしもいわゆる「書籍」という体裁を取らずとも外の新しい形、フィルムや磁気テープ、光ディスクなどで目的が達せられる場合も多いわけである。「書物」という手ごたえのある、見た目にも楽しく頼もしい「知的財産」に対する愛着ということは別にして、図書を本来の目的や内容から考え直してみると、パソコンの「知は力なり」の言わんとする「物事を支配するための知識」が新しい手段で保持され、蓄積され、ますます能率的に活用されるようになったと見ることもできる。膨大な情報量を蓄え、迅速に加工処理し、瞬時に検索し、更には言語の違いを克服して国際的に利用可能にするといった理想を掲げて、ハードとソフトの両面から可能性を追求して行くこと、それが情報化社会における「力ある知識」獲得への努力のニュートレンドである。—そしてこれはまた読みすての時代に対処していく図書館のこれからの課題にも関係してくるようである。

「図書館の思い出」

東洋医学臨床ユニット 行 待 寿 紀

小学校の頃からどういうわけか図書館に縁があり、小学校から中学時代までは図書係を担当

させられることが多かった。

田舎の小学校であったので、各教室では、各

自が本を持ち寄り、20~30冊の本を机の上に並べて出しノートを置いただけのそまつな図書館であった。近くの公民館でも毎週2~3回、夜に借出しがあったので、江戸川乱歩の探偵物や、紫頭巾、鞍馬天狗等を夜中まで読みふけたことを憶えている。

その頃田舎でも映画館があったが、小学校時代は年に何回か学校から引率されて行くぐらいであったが、はじめて色のついた映画を見たということで、「シベリア物語」は今でも印象が深い。中学時代は学校にも図書館があり、本の種類もかなり多く、いろいろの本を読んだが、図書館で見つけた世界の映画の本がその後の趣味に大きな影響をおよぼすこととなった。その本でアメリカやヨーロッパでいろいろな映画が作られていることを初めて知ったのである。往年の名画といわれる「風と共に去りぬ」や、チャップリンの「ライムライト」あるいは「会議は踊る」等の名画のことを知り、また女優のグレタガルボ、マレーネディートリヒの名前を知り、男優ではチャップリンをはじめジャンギャバン等の名優がいたことを初めて知ったのである。

初めて名画といわれるものを見たのは、高校一年の時であった。田舎の映画館で「風と共に去りぬ」という映画が上映されることになり、学校の推薦もあったので見に行ったわけである。それまで観ていた日本の時代劇などと全く異なり、南北戦争を背景とするスケールの大きいストーリーとマックスタイナーの音楽（タラのテーマ）に出会い、それ以後、全くの洋画ファンになったのである。ちなみにこの映画音楽は、同じ年の「駅馬車」のためにアカデミー賞は受けていないが、音楽としてはこの「タラのテーマ」の方がずっと良いと思っている。先年、義姉が留学のため、この映画の舞台となったアトランタの近くに数年滞在していた折、一度は行ってみたいと思っていたが、ついにその願いはかなわなかった。

大学時代は、図書館はもっぱら自分の好きな本を読んだり、気の合った友人と勉強のことや将来のことを話したりする場所であったが、友人の一人に非常に映画の好きな男がいたので、意気投合して、講義をさぼって映画をよく観に行った。いろいろな映画を観たがジェニファージョーンズの「慕情」の音楽が今でも好きな音

楽の一つである。映画を見て以来、いつの日か、あの映画にでた丘を見たいとあこがれていたが、先年香港に行った折、訪ねてみたが、あこがれの「慕情の丘」はあまりにも期待はずれであった。

医師になってからは、2~3の大学に在籍し、またその間7~8ヶ所の病院にも出張したが、図書館ではもっぱら自分の専門に関係するものを見る事が多く、あまり他の分野の本を読むことは少なかった。しかし、いずれの図書館でも東洋医学関係の書物が置いてあることはほとんどなかった。

10年前頃、ある救急病院の医局の図書の中に、たまたま以前出会ったことのある医師の書いた漢方本を見つけた。そこには漢方薬を構成する生薬と、その西洋医学的ならびに漢方医学的な意義が簡単ではあるが、非常に明解に書いてあったわけである。当時漢方薬には興味を持っていたが、なかなか良い本に出会えなくてどのように勉強したらよいのか、いささか迷っていた時でもあり、その本を見つけたときは、一瞬、目の前のもやもやが、ぱっと消失した思いであった。

小生のように、西洋医学から入った者にとっては、構成生薬の意義（西洋医学的にも漢方医学的にも）をつかむことによって、漢方薬全体の作用の概略をつかむという方法は、比較的抵抗なく受け入れることができ、しかも東洋医学の知識も得られるという一石二鳥になるという利点がある。（残念ながら、その後あまり身を入れてやっていないので、一向に上達はしていないが）。

一冊の本との出会いによって、人生が変わったというような体験談を時々読むことがあるが、さもありませんと最近思うようになった。なんとなく通っているうちに、人生観が変わるかもしれないような本との出会いがある。

そんな機会を作ってくれるところが、図書館といえるのでしょうか…………

気楽に図書館に通いましょう。



情報通信・発信拠点としての図書館

生理学ユニット 西川 弘 恭

年末に“駒の館だより”の原稿を依頼され、正月休みに何か適当なテーマはと考え思いついたのが「図書とは文字通り図と文字で人から人に思想、現象を伝える手段としての本と雑誌であるが、図と文字で人から人に思想、現象を伝える手段は今の世の中本と雑誌だけではないであろう」ということである。口伝以外手書きあるいは印刷による書物が唯一の人から人に思想、現象を伝える手段であった時代にそうであったであろうように、図書のもつ意味を広く人から人に思想、現象を伝える手段として捉え、図書館をそのための様々な手段を備えた情報の受信・発信拠点として捉えるのが図書館の機能・役割をよりの確に現わすのではないであろうか。このような観点から改めて図書館について思いを巡らしてみたい。

前任の大学で毎年、図書館購入図書を検討する際、書類以外のビデオライブラリーが対象になり得るか否かが問題となっていたが、数年前から購入が可能となった。また私が昨年秋輸入したNMR関係の本に5インチのフロッピーディスクが付いていた。本学においても教育、研究、診療に関わる情報システムをいかに整備して行くかが具体的検討課題となっている今、図書館を見つめ直して見るのも意味あることと思う。

図書館の機能と役割を文字通り

図書（本と雑誌）の収集

図書（本と雑誌）の保存

図書（本と雑誌）の供覧

とする既成の概念では記録の手段が多様化した現在では上記のビデオライブラリーごとき問題が次から次へと出て来るであろう。現在用いられている記録手段を思いつくまま挙げると、

紙	本、雑誌
フィルム	マイクロフィルム、写真、映画
磁気テープ	録音、録画、文字の記録
磁気ディスク	録音、録画、文字の記録
磁気カード	文字の記録
光ディスク	録音、録画、文字の記録

LSI 録音、録画、文字の記録等々がある。このように並べると紙に印刷された本、雑誌は情報伝達の1つの手段にすぎず、それ以外の手段が日常生活では大きな領域を占めることが多々ある。そこで図書を情報と置き換えると、図書館は情報館、情報センターとなり、その役割は、

情報の収集

情報の保存

情報の供覧

と表わされ、図書（紙に印刷された本、雑誌）に拘る理由はなくなり、種々の前述の情報伝達手段を介する情報受信・発信拠点としての意味が強調され、明瞭となる。上記のごとく図書館を捉える時、図書館は情報処理システムの中核として機能と役割を必然的にもつことになる。情報センターとしての active な機能と役割を果たすためにコンピューターは不可欠のものである。コンピューターは上記情報伝達手段（磁気ディスク、磁気テープ、磁気カード、光ディスク、LSI）とは一体不可分であることはもちろんであるが、情報処理における時間と空間の効率的な利用に必須である。コンピューターの利用はワープロ、データ収録、数値計算、事務処理以外にデータベースの利用が今後益々増加するであろう。

データベースを提供する施設には公的、私的、国内・国外様々な形があり、サービスの内容とその利用に関わる経費も様々である。例えば通産省化学技術研究所は種々物質に関するNMRスペクトルをはじめ赤外スペクトル、ESRスペクトル、ラマンスペクトル、質量スペクトルのデータベースを作り公開している。これらの利用は個々の図書館に書籍や雑誌が備えてなくともデータベースは補い得る可能性があり、本学の研究機能を何倍にも高める力となる。

ここに情報センターとしての図書館が備える必要のある機能と設備を挙げてみよう。

従来からの機能と設備の例

閲覧室

書庫
雑誌書架
事務室
情報センターとして期待される機能と設備の例
コンピューター
学内端末装置を設置し、随所からの図書館の利用を可能とする。
学外（国内・外国）コンピューターと結合する。
データベースを文献検索、実験データの検討に利用する。
ソフトライブラリー
事務処理には蔵書リストや利用者登録などに利用する。
視聴覚施設

フィルムライブラリー
ビデオライブラリー
これらの一部はすでに現実のものとなっている。が図書館が情報センターとしての機能を果たすまでには至っていないと思われる。その運用にさらに工夫が必要とされるところである。
全てを実現するには費用、スペース、人を必要とするがいずれ必要なものであると考える。
正月休み開けの4日、出勤時間以前戴いた“駒の館だより”7号と8号に目を通したところ、8号の巻頭に水越学長が図書館は今や情報資料館とするのがふさわしいとすでに書いておられるではないか！私の本小文が本学図書館の具体的将来像のたたき台になり、正月の夢が正夢になれば幸いである。

このごろ思うこと

病原微生物学・免疫学ユニット 雨 具 孝

時の経つのは早いもので、私が本学に来てからもう1年近くになる。日々の山々や川の風景は、しかし毎日のように変わり、山の端から登ってゆく霧に、太陽にはっとさせられ、中国の水墨画の風景や、玉堂の山村風景など人の心をとらえる風景とはかくあるものかと納得してみたりもする。環境は人の心や生活のあり様とかくも深くかかわっていたのだったかと今さらながら思いを深くする。

茨城の片田舎に生れ（今ではもう家ばかりで面影もほとんど消え失せたが）、予備校に行くため東京に出て、横浜、東京、京都と渡り、また子供のころの様な村のたたずまいに回帰した。都会生活というのは何はともあれ便利なものであるちょっと買物に出れば何でも揃う。これは金さえあれば何でも買えるかの様な錯覚へと人々を誘う。物もいろいろな物があることで、見ているだけでもたしかに楽しげに、時としておどろおどろしい気分になる。何でも商品になる。何でも金をとるようになる。そして、様々職業をもち価値感も、生活意識もちがうたくさんの方が濃密な空気の中に（このごろ私は町に行くときすぐ頭がいたくなる）生きている。この間、夕方町からの帰りにドブ川の側を温もり体いっぱいにして、風呂桶を小脇にかかえ家

路につく家族をみて何だかとてもなつかしくなった。少し前の私だったら、“この寒いのに住宅事情が悪くて風呂屋通いが大変だな”としか思わなかったろう。物の感じ方は人それぞれに、そしてその時々心の持ち方で随分と異ってくるものだ。都会は、膨大な多様性も飲み込んで、自分に新たな世界を、生きざまを発見させてくれる。しかし、心を揺り動かす目は、都会の日常の中で感動する心のゆとりが失われて行くのではないであろうか。

今、これを書きながら、あの巨大なルーブル美術館の中で自分が何に感動したのか思い起こそうと思ってみた。頭に浮かぶのは、巨大な雑踏とそれをのがれてカフェテリアで飲んだ安ワインの味である。心に残っている画はあの橋の上の叫び声である。（ムンク1895 バーゼル美術館）。

今でも自分の中にこの絵の残像が刻み込まれている。またオルセー美術館でのビーナスの画。あの海の上のこれぞ地中海の太陽と海で生まれた色気と豊麗を、女の圧倒する生命力を焼き付けられた。生活はある意味で日常の繰り返しである。バルビゾンに住む農民にとっては1日の農作業と夕日と教会の鐘の音はごくあたりまえの日々の出来事ではないかも知れない。しかし、

1日くたくたに疲れるまで働いて（または勉強して）ああ今日はよく働いたここで終わろうと背筋を伸ばしたときの心持ちは人々に共有できることであろう。違いは自分の仕事の意味が作物を作るように“見える”仕事ばかりではないし、疲労のあり様も随分仕事によって異なる。生活している者にとっては、“日々の農耕、収穫、祭り”のパターンというものは、それなりに多様な労働の中に根づいているのであろう。日常の中にも、そして、自分の生活を離れた所でも心ときめかして生きてゆきたいものである。

好奇心の塊まりの中から、自分が何に取りついていくか、登り口を決めねばならない。私の迷いの時代が今思うと大変長かった様に感じる。素粒子をやりたいかったり、生体高分子をやりたいかったり、右往左往して自分なりに悩んだ。だが、結局時代の流行に乗り切れなかっただけだった様に今では思える。最終的に引かかったのが、Burnetの免疫理論と、Goodの免疫の系統発生のおもしろさだった。当時Burnetは（1958年）免疫現象、感染症、免疫症を全体的に把握した上で今で言う理論生物学的仮説の体系を作り上げた。当時屁屈屈を言うのが身上だった私にとって—それまで生物学的にほとんど興味をわかさなかった自分であるにも拘らず—これほど飛びつき易いものは皆無と思えた。そして今日まで、もう20数年も免疫学をやっている。しかし、今日までの免疫学の歴史を顧みても大きな意味では誰一人Burnetを越えられていな

い。彼の理論の上でそれぞれの分野の記載と修正を加えていった感がある。私自身としてはこれからもT細胞に固執して、“細胞の運命が一体何によって決っていくか”を私なりに進めて行くことに集中したい。世の中では細胞工学とか遺伝子工学とかが時代の流行として、“金のなる木”としてもはやされている。もちろん、人の健康に役立つ薬や、有用な農作物も大切だ。しかし、研究者の価値観が、一つの強圧のもとに、あるいは学会の流行のもとにみんなが同じ様に考え、同じ様な技術で、同じレベルのことをやっていたら全くつまらない。学問のすその広がり、そして人々の価値観の多様化の中で、ますます個性化された人間が、自分の喜びを求めて学問をしたいものだと希うのは私ばかりであるまい。

松浦、熊本両先生の教えを受けて胸腺に入ってくる自律神経を自分の目で見せてもらったとき、論文で見るとは違った美しさがありました。私は、私なりに本学のテーマである東西医学の融合、鍼灸の科学化にむけて、T細胞分化と神経系という観点から展開して行こうと歩み始めました。そこで解剖学の先生方を含め神経科学の研究の面で、また関連した東洋医学の諸先生との協力、討論、批判が受けられることは大変有難いことです。私自身の個性を伸ばすには、私自身の研鑽と人のつながりと環境の3つ共に必要です。若い諸君にも、どしどし伸びやかに、批判に身をさらして可能性を広げてほしい。

Rhythm —それでも私は Jazz が好き—

泌尿器科学ユニット 金子 宏

私とJazzとの出会いは、高校1年生の時にまで逆戻り、昭和26年生まれ私には世の中の例にもれずBeatles世代の中心におり、レコードの出る度に店に走っては買い求め、その歌詞を空んじるまでに記憶したものである。それがいつのまにかR&Bに走り、中学3年3学期には“Black People's Musicでなければ音楽ではない”と思うまでになった。

何故か？ 答は簡単である—Rhythm—である。あの独特のリズム感は日本人にはとてもま

ねすることのできないものである。Modern Jazzを聞いていても、日本人の演奏はすぐにわかる（最近では日本人のリズム感向上のためか、徐々に日本人の演奏がどうかわからなくなりつつあるが）。

それがR&Bにのめりこんでいた時分に友人から借りたレコード、John Coltraneの「My Favorite Things」を聞いたときには文字通りのimpulse（注：レコードレーベルがImpulse）を受けたのである。彼の演奏はdrumsのリズ

ムから時にははずれて（これが独特のリズムで、）solo improvisationを展開して「これぞ陶酔の世界、」に到達していたように感じた。このレコードとの出会いを境に Jazz に傾倒していったわけであるが、大学に入学後軽音楽部に入部して Jazz を本格的に勉強したもののどうしても打破できないのがやはりリズム感であった。大阪の Yamaha Jazz School に入ってみたものの、入学者はプロ志願が 80% 以上で、Cord Progression は何とか理解（といっても、Tonic, Subdominant cord etc…の代理コードの選択法など難解なものが多いのですぞ、）できるものの、リズム面でいざ楽器をみせられリズムをとれといわれて try すると、時としていわゆる 'ウラ' に入るものである。これは、例にとるなら左手で 4 回叩くのにあわせて、右手で強弱強弱…と 8 回叩く場合に弱強弱強……となる場合をいう。このリズム感だけはどうも先天的なものではなかろうかと思ひ込み、演奏は他人にまかせ以降はもっぱら Listening 専門になっている。

医者になってから数年後、いつだったか覚えていないが NHK TV で日本人と欧米人のリズム感の差を実験していた。これによると大半の日本人が欧米人に比較してリズム感が悪いと指摘し、これが日本人の外国語に対する affinity の乏しさにつながると結論していたように記憶している。

私は英語はそんなに不得意でないと自負していたものの（得手とはいっておりません、）。TV の放映を見て日本人の外国語に対する乏しさについては部分的に納得できる面もあった。それは私の周囲の英語に不自由を感じない人の 90% 以上が、クラシックやジャズなどの Western Music 愛好者で演歌などの邦楽愛好者は少ないのである。演歌愛好者が英語ができないというのではないが、私の知人の邦楽愛好者の 1 人などは英作文は長じているものの、外人との会話の際には、我々日本人には英語を立派に話しているように思えても、外人はこの時首をかしげてばかりしていた。外人の話によると、彼は文の途中で一息つく所が全然理解できないそうである。（一息つく所が欧米人と違うらしいのである。）やはり、それはリズム感の違いによって生じたものであると私には結論されたのであ

る。

現在の日本社会には英語が日常生活の一部に溶けこんでいるので、英語に対する affinity は強いはずであるのに我々日本人は native speakers の前では実力の 1/10 も発揮（会話力が）できないように思う。英語教育法に問題があるというのではない。私が教授された教師は立派に教えてくれたと感謝しているが、問題はやはりリズム感の乏しさが英語を fluent に話せない“元凶”であると思っている。native speakers 以外のヨーロッパ人には発音がひどい人は多くみうけられるのに、彼らは一定のリズムで話すため、ちゃんと native speakers に通じている。

これらの理由から私は将来を考え（ちょっとおおげさかな？）、我々日本人は幼小時からリズム感を培っていけばよいとおもっている。これをベースにすれば、義務教育程度の英語力で十分に海外旅行程度はいけるはずである。ちなみに、私の長女にはリズム感養成のために Rock や Modern Jazz を聞かせている。

……現在の成果ですって？長女は Rock の 8 beat にはマアママ体をあわせてリズムをとれるのですが、Jazz の 4 beat にはマダマダ、5 beat の“Take Five”なんてトテモトテモ、でも、乞御期待、！ なにやら大リーグ〇〇〇みたいで……

以上、くだらないことを書いたものの、結論は私にとってリズム感のある Jazz が私の人生の一部になっていることをいいたいのである。人がなんといおうと、それでも私はジャズが好き！



西洋図書館小史(その九)

附属図書館 八木克彦

IV 近・現代篇

1989年11月9日、ベルリンの壁に穴が開けられました。東西ドイツの往来が自由になり、いまやその統合問題が世界の耳目を集めております。1年前には夢想もできなかったことで、東欧諸国の劇的な変化を含め、昨今の急激な歴史の展開には目を瞠らされるものがあります。

今回は、そのドイツの図書館について概観してみたいと思います。

ご承知のように、プロイセン王ウィルヘルムI世がドイツ帝国初代皇帝の位についたのは普仏戦争のおわり1871年1月のことで、二十数カ所の小王国や大公国が集まって不完全乍ら民族的統一国家を形成し、名宰相ビスマルクの下で国力を蓄え、ウィルヘルムII世の時代に第一次世界大戦の洗礼を受けましたが、その後も第二次大戦に至るまで、ドイツは国全体が多くの州或は地方(Land)に分かれており、地方分権的色彩の強い国家でした。

図書館についてもこのことは地方図書館の重視という傾向になって現れ、国全体としての制度的統一は欠くものの、各州(或は地方)の首府には大きな図書館が育ち(例:ミュンヘン宮廷図書館→バイエルン国立図書館, ドレスデン宮廷図書館→ザクセン州立図書館)、夫々の地域の文化的中心となるとともに、互いに連絡をとって相互貸借制度を発達させました。

また、19世紀後半の大学図書館は、以前に述べたゲッチンゲン大学図書館のすぐれた運営方法を採り入れ、ボン大学、ブレスラウ大学、ベルリン大学等の図書館が近代的な学術参考図書館化をはかり、活発に活動してその後の世界の学術参考図書館の模範となりました。

もともとドイツの大学図書館はその殆どが学生だけでなく一般の学者や研究者にも公開されていまして、州立図書館とよく似た性格を持ち、なかには合併して学術参考図書館となるものも幾つかありました。

公共図書館(都市図書館)についても、中央の統制は比較的緩く、各州または都市の自主的

運営に委されておりましたが、第二次大戦後は東独はソ連の、西独はアメリカの影響を強く受け、夫々ニュアンスの異なった発達を示しております。

即ち、東独においては図書館員は単なる図書館の管理人、情報提供者にとどまらず、教育者・広報担当者の役目を負う者とされ、公共図書館は市民や勤労者などに対して、読書を通じて政治的・イデオロギー的広報を優先させるべきものとされております。

現在、東独の公共図書館数は12000館に達し、児童図書館についても人口2万以上の地域社会に設置すべしとする法令があります。

調査・研究図書館としては、ベルリンのドイツ国立図書館やライプツヒヒのドイッチェ・ビュッヘライが代表的な館です。

ドイツ国立図書館は現在東ドイツの中央図書館的存在ですが、前身はプロシヤ州立図書館で、その創立は1661年に溯り18世紀末には既に15万冊の蔵書を有しておりました。19世紀後半から20世紀にかけては、当時ドイツの図書館界をリードしていたプロイセン州の文部大臣アルトホフの指導により、プロイセン州の全大学図書館と共同でアルファベット順の蔵書目録を作成、また相互貸借制度を推進1914年には新館をウンター・デン・リンデンの大通りに建設し、1937年には国際間相互貸借センターとなっております。

第二次大戦中1943~44年に数回にわたって戦禍を被り、戦後は東西の分割によって図書館のコレクションも二分されましたが、1946年ソ連当局の援助を受けて再開、1954年11月ドイツ国立図書館(Deutsche Staatsbibliothek)と命名され現在に至っております。

保有する資料は一般図書約350万冊(西独に散在するものを含めると520万冊)、多数の地図、アジア・アフリカ・コレクション、990冊のインキュナブラ(東独のみ)、バッハ、ハイドン、ベートーベン、シューベルト等の楽譜筆稿多数を含む写本等々です。(この項つづく)

近着東洋医学系図書一覧 (和書)

(平成元年1月～12月収蔵分)

- 和刻漢籍図書集成 1～3・7・8
小曾戸 洋 他編 エンタプライズ 昭63
- 臨床中医学概論 張 瓏 英 自然社 昭63
和訓黄帝内経素問
小寺敏子 訓読・監修 東洋医学研究会 昭63
- 図説東洋医学 奇穴編
木下晴都 他 学習研究社 昭63
- 蔵珍要編 一朝鮮の鍼法一
松 又 溪 医道の日本社 昭63
- 医の民俗 (日本の民俗学シリーズ 7)
根岸謙之助 雄山閣 昭63
- 図説東洋医学 用語編
大塚 恭男 他監 学 研 昭63
- あ・ま・指圧・鍼灸・柔整 受験ポイントマスター基礎科目編
執筆小委員会編 医道の日本社 昭63
- 鍼灸素論 一古典鍼灸の現代的アプローチ一
命道会漢方古典研究会 編著 谷口書店 昭63
- 初めて読む人のための金匱要略ハンドブック
池田 政一 医道の日本社 昭62
- 中国のランセット 一針灸の歴史と理論一
魯 桂 珍 ニーダムJ. 創元社 平1
- カイロプラクティック講座 一整形学検査法昭一
竹谷内宏明 他 編訳 科学新聞社 昭59
- 脊柱・骨盤のテクニック カイロプラクティック講座
竹谷内宏明 他 編訳 科学新聞社 昭62
- 現代鍼灸臨床の実際 松本勅 医歯薬出版者 平1
- 中国漢方医学大系 張 明 澄 東明社 昭63
- 理論漢方医学入門 升水逸郎 東明社 昭63
- 中国式ひとり按摩 一その理論と実技一
永 谷 義 文 他 エンタプライズ 平1
- 大師はり百年史 谷岡賢徳 谷岡昌子 昭63
- 要穴の取穴 福本憲太郎編 経絡治療学会 昭63
- 新訂 電気針療法
清水完治 編著 エンタプライズ 昭63
- 臨床鍼灸古典全書 7～12
篠原孝市 監修 オリエント出版 平1
- 臨床医のための針灸漢方治療指針
柱本俊二 他クリエイティブ出版 昭63
- 国際鍼灸臨床学術会議論文抄録集
1989年5月2日～5日 厚生統計協会 平1
- 漢方医語辞典 西山英雄 編著 創元社 昭59
- 針灸学
上海中医学院 編 井垣清明 他訳刊々堂 昭63
- 中国漢方医学概論
南京中医学院 編著 中国漢方 昭59
- 中医学入門
神戸中医学研究会 編著 医歯薬出版 昭63
- 針灸臨床の理論と実際 上・下
天津中医学院編 森和 監訳 国書刊行会 昭63
- 現代中国針灸配穴事典 症候別・病名別
東医針法研究会 編著 燎原書店 昭60
- 気へのアプローチ 一医学革命と気の治療一
日本漢方協会編 自然社 昭63
- 東洋医学善本叢書 9～15 オリエント出版 平1
- 道教と不老長寿の医学 吉元昭治 平河出版 平1
- 黄帝内経太素 仁寺本写 付蕭延平本
小曾戸文夫 監修 築地書館 平1
- 臨床中医学の診断と処方
鈴木章平 エンタプライズ 昭63
- 図説 顔面診治法
李家雄著 吉元昭治 監修 谷口書店 平1
- 傷寒論 宋版・示日復刻版
龍野一雄 編オリエント出版 平1
- 金匱要略 復刻版 龍野一雄 編オリエント出版 平1
- 金匱要略 和訓・口語訳 復刻版
龍野一雄 編オリエント出版 平1
- 金匱要略 浅述
譚日強編著 神戸中医学研究会 医歯薬出版 平1
- 症状による中医診断と治療 上・下
趙金鏞 主編 燎原書店 昭62
- 中医証証備要 秦伯末 他著
神戸中医学研究会 医歯薬出版 平1
- 顔面反射視診法 田代儒穂 谷口書店 平1
- さて、死ぬか 一死処に主となれ一
伊藤真忠 柏樹社 平1
- 漢方治療症例選集 1
緒方玄芳 現代出版プランニング 昭63
- 温病学 一理論解析とその応用一
成都中医学院 主編 東方書店 平1
- 図解 按摩療法
劉世森・高濟民 編著 エンタプライズ 平1
- 常用カイロプラクティック マニュアル
山根 悟 エンタプライズ 平1
- 腰痛全科 一難治性腰痛の診断のしかたと手技治療法一
高木幹市 エンタプライズ 平1
- 最新 鍼灸治療学 上・下巻 昭61
木下晴都 医道の日本社 平1
- ハンドブック 耳針法治療の実際
NOGIER, P.M.F 原著 吉川正行
エンタプライズ 平1
- 現代医療と漢方薬 鷗忠人 医療ジャーナル 昭63
- 中医臨床大系 12.22.23.25
南京中医学院 他主編 雄輝社 昭59年～61年
- 朱氏頭皮針 朱明清・彭芝芸 東洋学術出版 平1
- 万病回春解説 (東洋医学選書)
松田邦夫 創元社 平1
- 標準経穴学 日本経穴委員会 編 医歯薬出版 平1
- 脈診 その手技と古典的背景
船木寛伴 編 緒 谷口書店 平1
- 気をめぐる冒険 一実践・気の医学一
勝田 正泰 柏樹社 平1
- 針灸時間治療学 一子午流注法一
川井正久・王永錚 編著 谷口書店 平1

あとがき この1年、世間は何かと騒がしかったのですが、当館はおかげ様で平穩に日常業務を続けて参りました。所蔵資料も随分増えましたので精々ご利用下さい。今回も諸先生方から、夫々異なったテーマで趣きのある玉文を寄せて頂き、心暖まる思いをいたしております。ご協力、ありがとうございました。(K. Y.)